

# 兒童心理學文獻抄 九

牛島 義友

## 兒童の知覺界

### 五、幼稚園兒を中心として

前數回に亙り、最初の二ヶ年間の乳幼兒の精神發達について諸研究を紹介したが、次に其後の數年間の兒童、即ち幼稚園に通ふ年頃の子供に就いて研究して行く事にしやう。

此時期の子供は本誌讀者の最も關心を持たれるものと思ふ故に多少前よりも詳細に紹介したいと思ふ。

此の時代は乳兒時代と異つてヨチ／＼した歩き方を益々しつかりして來、そこらを駆け廻りそろ／＼おいたをして困らせられる様になつて來る。身長も目に見えてスク／＼伸び、六歳頃は生れた時の二倍の身長に達する。生活力も旺盛で死亡率を見ても、も早乳兒時代の危険期は去り年毎

に體の方の心配は減じて來、それと反對に知識は増加し、言葉数は恐ろしくふえ、特別な習慣が形造られ、個性が明瞭になつて來る時代である。それと此の時期は精神的面の配慮が最も大切なる時代である。人間の性格の基礎は實に此の時期に養はれるのであつて此の時期に養育指導宜しきを得ない此の次の學齡兒の頃からそろ／＼困つた性質を現はして來る。不良兒なきが最初の不良行爲をなすのは七、八歳頃からであるが、此の原因は此の學齡前の時期の親の教育に起因するのである。

然らばこの時期の子供を如何に教養すればよいかといふ問題は此の時期の精神發達に即して考へねばならない。先づ基礎的な精神活動として彼等の知覺の世界から研究しや

う。

牛島、永松、兒童の知覺界に就いて 心理學研究、第五卷、昭和五年。

物を見るさいふ働らきの中には形、色、大きさ、位置の要素が含まれて居る。此の四つの要素が一つでも缺けることを正しく見る事は出来ない。併し此の四つの要素が子供に同じ様に重要なのではなく、例へば位置なごは子供の知覺の世界には餘り重要なものでない云はれてゐる。即ち子供はよく繪本を倒さまにして平氣で見入つたり、右向きの人の繪を模寫させるに左向きに描いてすまして居る。

又子供の描いた繪を見るに形は如何にも不器用で劃一的で特色がないのに、非常に豊富な色彩を用ひて居る事に氣付くであらう。又一般に子供は色のついた玩具を好む。是等の事は子供の生活に色彩が特別な意味を持つて居る事を示す様である。

故に是等の四要素に關係を調べて見る事は興味がある。その方法はカツ氏(D. Katz)の三圖形法によるのであるが、之は次の様なやり方になされる。今例へば色と形

のいづれが重要な要素であるかを決定するには先づ赤色の三角形を示しその下に赤色の四角と青色の三角を二つ並べて置き、此の中どちらが初めのものによく似てゐるか尋ねる。我々大人にこんな事を聞かれると一方の方は初めのものと同じだが形はちがふし、他方は形は同じだが色がちがふので、どちらがよりよく似るかとは定めかねる。即ち概念的に考へる爲に答が定まらないが、幼兒に斯る概念的な思考はなす見な感じ直ぐ右の方が似てゐるか左の方が似てゐるか簡單に答へる。今もし子供が赤の四角の方が似てゐる云へば形よりも色が重要な要素である事を示し、青の三角の方がよりよく似てゐるに答へれば形の方が重要な手掛りとなつてゐる證據となる。斯るやり方四つの要素の重要性を調べていつた。

山手方面の四幼稚園と下町方面の二幼稚園の男兒百十二名女百八名合計二百二十名が此實驗に参加した。年齢から見ると三歳から六歳の子供である。

(I) 位置關係 口形の尖線が右向になつて居るものを標準として左向のものに下向のものを示し、何れが前者に似

て居るかミ質ねた處、さぢらも似ないミ答へたものは九・九%で他は何れかに似てゐるミ云つて居る。併し左向四十四%下向四十五%で大差はなかつた。併し此刺戟圖形は元來尖線が下に付てゐるようが横に付いてゐるようが大した意味のない圖形である故に、今度は左向の鳥の形を用ひた、之に對して九十度横倒れの位置のものミ右向のものミを較べさせた。元來鳥は立つて居るものである故に横倒れの位置は奇異の感を起させるミ考へられる、事實横倒れの方が似てゐるミ云ふものは三十一%しかるないのに對し、右向の方は六十三%居る。故に前の圖形の様な元來一定の位置を要求しないものゝ場合にはどんな位置に置かれても同じものミ見られるが後者の様に一定の位置を要求するものだミ位置が重要な意味を持つて來る。

(II) 大きさ 蟻や蚊の如く小さな動物の形を標準として、それよりも小さい蚊ミ大きな蚊ミを示した。蚊は元來小さなものであるから小さい蚊の方を選ぶ者が多いだらうミ豫想した。所が此豫想に反して大きな蚊を選ぶ者が相當に多かつた。之は是等の圖を蚊ミか蟻ミは知覺せず、かぶ

ミ蟲「ミか」さんば」等ミ見てしまふ者が居た爲ミ思はれる。

(III) 大きさミ位置 大きさミ位置ミ何れが重要な要素であるかをみるに殆んぎ同じ程度に重要であつて、位置が變るミ同じ物ミ見られなくなるし、又大きさが異つても違つたものミ知覺されて來る。

(IV) 色ミ位置 デクードル(Descouderes)は色が同じならば位置が異つて居ても同じミ知覺する者は九十三%に對し、色は異つてゐる位置が同じ方を選ぶ者は七%に過ぎなかつたミ報告して居るが、今此實驗に於ては前者四十九%に對し後者四十八%で殆んぎ相違がなく、色に對して位置が對等の役割を演じて居る。

(V) 色ミ大きさ 前のデクードルは色を選ぶ者九十四%に對し大きさを選ぶ者は六%しか居なくて、色さへ同じならば大きさ等はいくら異つても同じ様なものミ知覺されるミ報告して居るが、此實驗の結果は色を選ぶもの四十五%、大きさを選ぶ者五十二%で、大きさが矢張相當重要な要素ミなつて居る。

(VI) 色ミ形 此問題は多くの論争ミ異なる結果を示して居

る故に詳細に述べる事にしよう。

カッツ(D. Katz)は丸、四角等の幾何學的圖形に就いて研究した處四年八ヶ月以下までは例外なしに色の同じ方を似て居る云ひ四年十ヶ月の子供から始めて形が同じ方を似て居る云ふ者が現れて來たが、全體から見れば色の方が多く、精神發達の低い段階では色が主になつて居る云つて居る。其後彼は此考を動物に就いて證明せんとし、レールベス(Revesz)と共に鶏に就いて験べた處豫想通り色の方を選んで居た。併し猿に就いて實驗した處反對に形の同一の方を選ぶ者が多くて、説明に困つて居た。次にデクードルは圓、三角等の無意味な幾何學的圖形の場合には色の同一の方を選ぶ者が多いが木ミカ人等の有意味圖形を用ふる形のものの方を似てゐる云ふ者の方が多くなつて、刺戟の性質によつてちがふものべてゐる。

シヨル(Scholl)はデクードルと同じ様な結果を出し、人間には形を主に見る型を主にする型があるを考へて、類型學の問題を結び付けて居る。即ち乖離性の人(無口、控へ勝ち、小心な型)には形型が多く、燥鬱性(社交的、情

緒豊か、寛大)の者には色型が多いを述べて居る。もし斯る事實が確證されるならば、色を見るか、形を見るかといふ風な簡單な事によりその人の一般の性質が分る事となり甚だ興味ある問題を含んでゐる。

ブライアン及びグーデナフ(Brian and Goodenough)の結果による三歳以下の子供には形に基いて選ぶ者が多く、三歳頃より色による者が現れ初め、六歳頃迄は半々の形で現はれ、それ以後は段々形の方が多くなる。かく年齢によつて著しく相違のある事を見出した。此の様に色と形の問題が色々複雑な形に發展して居るが、此の牛島・永松の研究に於ては幾何學的圖形の場合には色を選ぶもの平均二四・七%、形の方を選ぶ者、六八・二%、及び木や花の様な有意味のものも同様で前者二四・五、後者六九・二%で以上の結果を相違し、トビー(Tobie)やキューンブルグ(Kueburg)の結果も同様になつて居る。

その後西谷謙堂氏(兒童に於ける色と形の知覺、哲學第二輯)は同様な方法で幼稚園兒、小學兒童に就て研究した所、幼稚園兒童は色の方が多いが小學兒童になるに急に形

の方がふえて居る。

植松正氏（兒童の知覺判斷に於ける色彩ミ形象ミの競合問題 教育心理研究第八卷）は、託兒所兒童百九十四名に就て研究した所色型が五十五%、形型が四十五%となつて、いづれも幼稚園兒童には色型の方が多くなつて居る。

今幾何學的圖形竝に有意味圖形の結果に就て諸研究の結果を表示するミ次の如くなり、それ々の結果は一致せぬが大體に於て色型の方が多くなつて居る。併しその割合はフォルケルト、カツ（人數も實は非常に少ない）の様に色型が壓倒的に多いミは考へられず、寧ろ半々に近いミ考へるのが正しからう。又有意味圖形無意味圖形等の刺戟の條件によつて結果が異なつて來る故に簡單に結論を下す事は出來ない。

併し小學兒童になるミ形の方が多くなる事は從來の結果が一致して居る故に大人になる程形態が知覺の主要な要素となつて來る事が考へられる。此の意味では初めのカツの考へ方即ち色彩は原始的なものであつて、精神の發達に従つて形の微妙なる相違に興味が移り知覺の世界が精密に

	幾何學的圖形		有意味圖形	
	形型%	色型%	形型%	色型%
フォルケルト	0	100		
カツ	15	85		
デグーデル	31	69	61.5	38.5
ンヨール	37.2	50.9	50.9	39.2
ブライアン、グーテナフ	48.9	51.1		
トキンブルグ	39.5	33.3		
キーンブルグ	65	35		
牛島、永松	68.2	24.7	69.2	24.5
西谷	32.2	67.8		
植松	45	55		

ものであり、日常生活を美化する基となるものである。

なつて來るミ考へられる。幼稚園兒の教育の問題ミしては彼等に親しみの深い色彩に就ての豊富な知識ミ經驗を與へてやる事が好ましい。此の色彩の世界はやがて繪畫の理解の道を拓く

